

第5章

育休取得の効果

育休経験がもたらした育児と仕事の好循環。育休がもたらしたさまざまな変化

- 子育てすることで、人間的に成長。思いやる気持ちや謙虚さを身に着けた
- 育休中の経験を基に、仕事で、コミュニティ活動で、さらに活躍
- 育休に快く送り出してくれた職場に感謝。仕事にも一層力が入るように
- 育休取得者の登場で、職場が成長
- 夫婦両方が家事も育児もできるから、お互いにフォローし合える関係に
- 仕事の質と速度を向上させて早く帰ることで、仕事も生活も充実

先輩育休パパから



5-01 育休の取得をためらわせないためには、職場における環境づくりや意識改革が必要

3度の育児休業を経験して

石塚 健一 さん

1 はじめに

題名で3度の育児休業を経験してとあるように、私には3人子供がいます。長男「友也」8歳、次男「大祐」4歳、長女「千花（ちはな）」1歳です。3人の子ども生まれて、3回の育児休業を取得しました。そのきっかけ、子育て経験等の話をします。

2 育児休業の取得を決意したきっかけ

きっかけは、「自分は子供が大好き」で、親戚の子供の遊び相手をよくしていました。

妻の妊娠がわかったときは、子育ては是非自分も協力したいと思っていました。妻の職業は美容師で、勤務先では社員の中のリーダー役として、そして、お客様のために頑張っており、妻を慕っているお客様も多い状況でした。そんなお客様のためにも仕事を長期間休むことは難しいのが現状でした。それなら私が、せっかく男性にも育児休業制度もあるのだから、それを活用して取得しようと思えました。

3 育児休業取得にあたっての職場や家族とのやりとり

職場についてですが、長男と次男は前勤務箇所で、長女は、現勤務箇所で取得させてもらいました。

両職場とも、上司をはじめとして職員皆さんの応援、協力があつたおかげで3度も育児休業を取得できたのです。本当にそれは感謝の気持ちでいっぱいです。しかも山梨県職員

初の男性の育児休業でした。

また一方で、初めての育児休業の時は、両親や親戚の反応は予想はしていましたが、厳しいものでした。やはり、世間体を気にしていたのです。「育児は母親がするのが当然」と思っていました。でも私の決意は固く、揺らぐことはありませんでした。

「育児がどんなものなのか。身をもって知りたかったし、今、諦めてしまったら貴重な機会を逃してしまおう、それにこれは最終的には夫婦の問題。それに父親が育児をしても立派に育てられるんだというものをみんなに見せてやる」そう思い貫き通しました。

両親も親戚も、何を言っても無駄ということがわかったのか、最終的には応援してくれました。次男の時は「またか……。」、長女の時は「えっ？ 3人目？」って感じでしたが……。

4 子育ての状況や感想

子育ては楽しさもあつたけど苦しさもありました。育児休業中は専業主夫になるわけですから、家事育児を一切しなければなりません。妻は毎日仕事で帰宅が遅いので、できる限り私がしました。そんな妻のためにも、妻の帰宅後は今日も子供達の様子等話をしてあげました。

育児にはストレスが付きもので、ついつい手をあげたくなることもありました。そんな時、子供達の笑顔を思い浮かべ、グツと我慢をしていました。

そんな家事育児の大変さも、長女を初めとして、父親に甘えてくる姿に、疲れが取れてしまいます。また子供達が「パパの料理はおいしいね。」と言ってくれるとうれしくなってしまう。私は親バカなのかな？とつくづく思う毎日です。特に長女は女の子だけあってかわいいです。最近「パパ」「マンマ」「バイバイ」等と言うようになりました。そしてますます親の甘さが出てしまって、手取り足取りと過保護になりがちな感じです。

5 仕事の復帰

復帰後は部分休業制度を活用させてもらい、16時に仕事を終え、子供達の迎えに行く予定です。その後、買い物そして家事、しかも子供が3人と言うこともあって、今よりも帰宅後は忙しい時間を過ごすこととなると思います。

長男次男で経験したように、仕事との両立は大変です。勤務時間が短い分、仕事に影響が出たり、子供達が病気により仕事を休んで看護した場合、職場に迷惑をかける事が心配です。

そして今まで同様子供達のためにきちんと食事の準備等家事をこなさなければなりません。家ではそんな疲れ切った姿を子供達には見せたくはないので、明るく振る舞わなければと思っていますが果たして大丈夫なのだろう

うか心配です。でもこれまで乗り切ってきたのだから頑張っていきたいです。

6 経験者として伝えたいこと

私自身、この育児休業は自分の人生にとってプラスになったこと、そして幸せでした。

父親だって、自分で言うのも何ですが、育児をすることができると、なによりも子供達の日々成長していく姿を見ていくことができるなんて、とても貴重な体験だと思います。だから短期間でもいいので、育児休業を取得して子供の育児にかかわって欲しいと思います。山梨県職員でも私に続いて男性職員が育児休業を取得しているそうです。今後ますます男性職員に育児休業を取得して欲しい事を願っています。

そして、何より大事なことは、職場の管理職や上司が積極的に休暇を取れるような環境・雰囲気作りをして欲しいと思います。私の場合は前にも言ったとおり、育児休業に理解してくれて取得しやすい環境だったからこそできたのであって、取りたくても、ためらいを感じてしまい、みんなに迷惑をかけてしまうと思い、諦めてしまう人が多いと思います。だからこそ、職場における育児休業を取得しやすい環境作り・意識改革が必要であると思います。



執筆者の横顔：

地方公務員 40代前半 30代前半

平成12年9月～13年6月、16年10月～18年1月、19年11月～20年11月(2年3ヵ月間)



5-02 育児によって、人を思いやる気持ちが増え強くなり、今の仕事に取り組む姿勢に繋がった

自分の成長のために

岩上 誠さん

「今度は大丈夫です。」この言葉をどれだけ待ち望んでいたことか。平成18年の秋、第2子の妊娠が確認されるまで、第1子の出産から4年間子宝に恵まれなかった。子供が大好きで、暇さえあれば兄弟おそろいの子供服をどうするかだとか、いっしょにハイキングに行こうだとか話をして、楽しく過ごすように努めていた。一方で、妻も育児休業取得後も仕事を続けていて時間のやりくりが厳しいにもかかわらず、婦人科に通い続けた。しかし、妻に子宮筋腫が見つかり、その核出手術を受けてからは、さすがに心身ともに追い込まれていた。そんな私達にとって、この吉報は何にも替えがたい喜びであった。

ところが、喜んでいるのもつかの間、想定していなかった懸念が出てきた。先の子宮筋腫の手術のため、第2子の出産は確実に帝王切開になり、今回の開腹方式は通常と異なるとのこと。そして、1ヵ月程度は絶対安静で自由に動けず、日常生活もままならないだろうというのである。長男の保育所への送迎を始め、いろいろと手数がかかるうえに、赤ちゃ

んの育児は相当の負担である。まして、安静になると買い物も行けず、育児用品の調達も滞るだろう。さらに、普段の生活でも、重いものは持てないとか、極端には赤ちゃんもだっこできないことも想定される。私は、せめて妻が普通に生活できるようになるまでは、赤ちゃんの育児をしたいと心から思った。ただ、私自身の状況は、平日いつも帰りが遅くなるまで仕事があり、1日とて休むことが可能とは考えられなかった。加えて、妻も産後休暇後に引き続き育児休業を申請しており、果たして私が育児休業をとることが可能か制度面でもわからなかった。

しかし、あんなにも欲しかった赤ちゃんのこと、また、4年間、病気と闘い、長男の育児にがんばってきた妻のことを思うと、居ても立ってもいられず、思い切って上司に私が休暇をとることの相談をした。そしたら即答で、「わかった。しっかり休んで奥さんを手伝え。お前の仕事は俺がフォローする。」と言ってくれた。私の上司はゴルフが好きで、仕事も余暇もきっちりこなすタイプである。

育児に男性が携わることになじみのない世代であるが、仕事と生活を両立するという観点で、好きなゴルフと育児をシンクロさせて考えてくれたらしく、本当に良き理解を得た。さらに、制度面でも勤務先の人事部に相談したら、妻の産後8週間は配偶者も育児休業取得可能であると教えてくれて、育児休業の取得を勧めてくれた。私の勤務先では、かつて男性で育児休業の取得者は居ない。しかし、私の心に迷いは無かった。

結局、3週間の育児休業であったが、私にとって非常に有意義な時間であった。赤ちゃんと一緒にいられたことは、個の尊さ、周囲の協力への感謝を想起させ、人を思いやる気持ちが増え強くなった。このことは、今、私の仕事に取り組む姿勢に繋がっており、部署のメンバーやお客様とコミュニケーション、コラボレーションを大切にしながら常に困難なテーマにチャレンジしている。仕事と

生活の両立は何よりも仕事面で高いパフォーマンスを挙げるために必須であると強く感じた。家族、上司を含め、協力してくれたすべての方に今は感謝の気持ちでいっぱいである。

最後に、育児休業を取得した経験から一言加えたい。男性が取得しやすい状況を構築するためには、時間面、金銭面、意識面の3点が揃って為し得ると考える。このうち、時間面では、配偶者の産後休暇8週間内での取得等、柔軟に対応できる。金銭面でも、育児休業給付金のみならず、地方公共団体の福祉制度の利用で対応可能である。あとは、意識面である。取得を希望しているが、単に気持ちの上で思いとどまっている方が多いのではないだろうか。そういった意味では、取得経験者の体験談や利用した制度を聞くことは非常に参考になろう。私ならば、「取得して間違いない。」と自信と確信をもって伝えたい。



執筆者の横顔：

会社員 1,000人～4,999人 30代後半
30代前半 本人・妻・子3人(男児1人・女児2人)
平成19年5月～6月(3週間)



5-03 育児休業を経験したことにより、常に時間を意識した効率的な働き方に

育休パパの奮闘記

小澤 正明 さん

我が家は、妻、5歳と1歳になる息子の4人家族だ。下の子が4～6カ月の時に、3カ月間の育休を取得した。

妻の職場は、職員6名という小さな規模の団体で、産前・産後休暇のみで育休を取得できないという事情があった。また、上の子の時は、3～6カ月まで、私と妻双方の親達が、交代でうちまで通ってくれて、朝8時～夕方5時まで孫守りをしてくれていたが、親達も年をとったので、今度は頼めないなあと思っていた。9月下旬が出産予定日で、妻が年内を休んだとして（妻の職場の配慮で、1カ月間の育休は可能ということで、きりのいい年内いっぱい休める）、保育園に入れる4月までの3カ月間のことから、私が休んでもいいかなあと思ったのが、きっかけだった。

職場では、年度末の人事異動の時期に育休の取得予定があることを上司に伝え、比較的支障が少ないと思われるグループへの内部異動という形で配慮していただいた。育休中は、臨時職員による補充はあったものの、正職員である私の分担をそのまま引き継ぐというわ

けにはいかず、結局は、同僚の方々に自分達の分担に加え私の分担も担当していただき、職場の方々に重い負担を背負わせてしまった。年度途中の育休ということで私の業務が中途半端になってしまったのも多くあり、この点でも職場の方々に大変な思いをさせてしまったが、皆さんの理解もあり、快く引き受けてくれた。育休を取得することが、こんなに職場に迷惑をかけることになるとは思っていなかったため、皆さんには本当に申し訳ないという思いと感謝の気持ちでいっぱいだ。

さて、妻の反応はというと、安心して妊娠・出産・育児に臨むことができたと言っている。産後3カ月しか休めなかったわけだが、短い分、思いっきり愛情を注ぐことができていたようだ。ただし、産後の体のことを考えると、もっと休ませてあげたかったと思っている。私の両親は、今後の仕事への影響と、ちゃんと育児ができるのかということ、とても心配していた。ただし、そうはいつでも育休中には2日ほどしかうちには来なかったが…。

育休中、息子は、ちょうど首が据わり、寝

返りができるようになる頃ということで、多分一番楽な時期だったのだろうと思う。しかし、息子が哺乳瓶でミルクを飲んでくれなかったのが、一番大変なことだった。最初の1カ月は、様々な哺乳瓶と乳首を買ってきて、何度も試してみたのだが、泣きながら抵抗して、飲んでくれないので、仕方なく妻の昼休みに職場の駐車場まで通い、車の中で母乳を貰っていた。母乳オンリーということで、妻は、夜の授乳に加え、仕事の合間をぬって昼間の授乳もあったので、体が相当きつかったと思う。私も、負担ができるだけ軽くなるようにと、妻の職場と上の子の保育園の送り迎えを毎日していた。息子と一緒に、ベビーカーに哺乳瓶をぶら下げながら公園を散歩したかったのだが、実際はそういうわけで、自宅の周辺しか散歩できなかつたのが心残りだ。

でも、鏡に写った自分の顔を見て笑ったり、童謡を歌ってあげると喜んだりして、間近で成長を実感することができたので、貴重な経験だったと思っている。

職場復帰後は、常に時間を意識し、工夫をして時間内に仕事を終わらせ、なるべく早くうちへ帰り、息子達の世話をしようとして努力している。息子が生まれる前は、時間外勤務も相当こなしていたが、その時と比較して時間当たりの仕事量は格段に増えており、効率的な働き方に変わったと思っている。息子は、妻の母乳を飲んでいる時と私に抱っこされている時に、一番幸せな顔をしているので、育休中にも増して愛情が深くなった。息子の笑顔を励みとして毎日の仕事に邁進しており、家族の絆も益々深まっている。



執筆者の横顔：

地方公務員 30代後半 30代後半
平成20年1月～3月(3ヵ月間)



5-04 あらためて子どものかわいさを発見！ 育児参加の経験が仕事の効率の向上につながった

貴重な育児参加

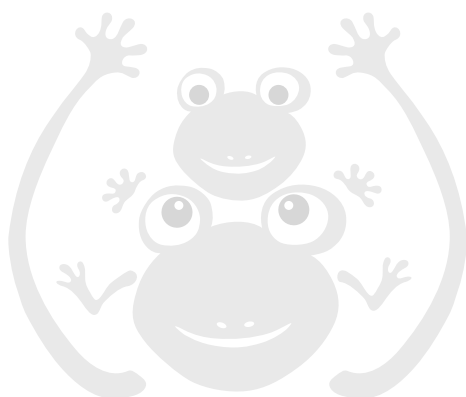
匿名

結婚7年目でようやく授かった我が子のために妻と相談の上で、育児休業を取得しました。早いもので、その時の子供は2歳になりました。当時は第1子ということで、何もかもが初めてで、毎日大変だったのを覚えています。

おむつ換えや着替え、お風呂入れ、ミルクなど、ほとんどの事は経験しましたが、特にお風呂入れが大変でした。ベビーバスを使っていなかったため、首もすわっていない3キロにも満たない赤ちゃんを湯船に入れるだけ

で一苦労でした。はじめの頃は我が子をお風呂に入れる喜びよりも落としてはいけないという不安感がありましたが徐々に慣れ、育児休業が終わる頃には楽しくなりました。新生児という子供にとっても貴重な時期に世話をすることができ、私自身の人生にも良い経験になりました。2歳になった今でも出来る限り仕事が早く終わった日は、一緒にお風呂に入るようにしています。

休日は子供中心の生活で公園や児童館に行ってお楽しみを過ごしています。子供の成長は





早いもので、たった2年でいろいろな事ができるようになるものだと日々感じています。仕事もちろん生活するために大切ですが、仕事を少しでも早く終わらせて。子供と接する時間をつくるように心がけています。もし、育児休業を取っていなければ、このようには思わなかったかも知れません。その反面、家族のために一段と仕事を頑張らなければいけないという思いが強くなり、仕事の効率が上がったように思います。

男性はなかなか父親になった実感が湧きに

くいものですが、私は育児に参加することによって子供のかわいさが分かりました。育児休業を取得するには上司や職場の方々の理解があつてこそなので、とても感謝しています。

これから、子供が生まれる方には、是非、積極的に育児休業を取得していただき、子供との貴重な時間を過ごしてもらいたと思います。

執筆者の横顔：

会社員 30代後半 30代前半 平成18年



5-05 子育て参加によって、我が家独特の育児分担が確立し、仕事上では効率性を意識するように

育休はパパを「子育ての当事者」にする

阪本 真一 さん

結婚は10年前。妻はすでに育児休業経験者でした。前の夫との間に子が生まれたときに10か月休業したことを、よく話してくれました。育児の合間に、アマチュア無線四級の資格が取れたとか、それはそれは楽しくて、またとない貴重な体験ができるんだなあという印象を持ちました。私なら、撮りっ放しのビデオの編集ができるかな…なんて。

実際に子どもができたときに、決定的に「休業すべき」と思った理由は、「私が休めば、妻の休業がその分短くて済むから」です。妻と私は、同じ市の正職員同士。当時1年間が主流だった育児休業を、夫婦二人で分ければ半年ずつで済む。同じ年度の内に戻って来れば、自分で開けた穴を、自分でカバーできる。これは職場にとっても好都合と考えました。

男性の休業は想定していないだろうと思い、1年前に課長級の上司に伝えました。休業者が出ると、臨時職員を雇用して補うことになるので、その準備をしてもらうためです。

上司も同僚も淡々と手続きを始めました。いい顔も悪い顔もしません。他の部署からも、

非難、賞賛どちらの声も聞こえません。驚くほどの無反応でした。妻と私、両方の職場で1年のブランクを作らなかったことは、少なくとも評価されているのにと思いました。

性別に関わらず就業・休業のチャンスを平等に与えるのが男女共同参画。それを推進する立場の行政職員として、誰も表立っては反対できないものの、内心では私の行動に違和感を覚える人が少なくないのでしょうか。その後6年間、私の後に続く男性はいません。

平成14年2月1日、第2子誕生。まず妻が、産後休暇に続いて8月15日まで休業しました。思い返してみると、私はその間も、在宅時は赤ん坊の世話をしていました。3歳以下の子どもを育てるのは初めてなので、ひたすら妻の言うとおりにしていました。育児書なんかは読みません。元々私は子どもが好きとか、こだわりの育児がしたくて休業したわけではありません。ただ妻と平等に働くために、そこに発生した子育てという課題を、妻と等分しただけです。男性たちがそういう意識に立てば、自然に休業も増えるでしょう。

8月16日、妻が仕事に復帰し、私の育児休業が始まりました。1月31日までの169連休です。育児といっても、難しいことを始めるわけではありません。それまで帰宅後にしていたことが、一日中に延びただけです。ただし、責任の重さが違います。朝、妻が出勤すると、私は6か月の息子と二人きりになります。妻が帰宅するまで、この子の命を一人で預かることになります。決まった回数・分量のミルク、離乳食…正に「仕事」です。「仕事人間」の方が適応しやすいかも知れません。育児は休業に値する、と実感しました。

育児休業は、「仕事と家庭の両立」の象徴のように言われます。でも育休とは、育児一辺倒が許される特別なひととき。両立に挑むのは、その後続く長い長い親の時間です。

夫婦両方が休業を経験することで、子育てに対する当事者意識が均等に根付きます。そ

うなれば、一方の仕事が多忙なとき、他方が育児をフォローできる。「両立」が容易になります。私の場合、保育園入園につながる期間に休業したため、必然的に入園の準備や手続きを担当することになり、妻よりも保育園に詳しくなりました。その勢いで、学校についても主に関わるようになり、妻に偏らない、我が家独特の育児分担が確立しました。それが一番大きな効果です。育児時間を確保するため、職場では定時退庁や計画的な休暇取得を意識するようになり、以前にも増して効率的な業務遂行を心がけるようになりました。

私の育休は、当時小学1年生の長男とふれあう時間にもなりました。実は赤ちゃんよりも、その子の相手が大変で、ビデオの編集なんてとても無理でした。しかし、その時期にしか得られない「育児」という経験の方が、はるかに大きな収穫と言えるでしょう。



執筆者の横顔：

公務員 300～999人 40代後半
30代後半 本人・妻・子2人
平成14年8月～15年1月(6ヵ月間)



5-06 男性の育休取得は皆無に近い状況の中、「制度を利用することに何の問題があるのか」とかばってくれた上司がいた

育児休業で得たこと

匿名

待望の子供が生まれたにも関わらず、相変わらず仕事の割り振りは多く、早くても家に帰るのは9時を過ぎてからだった。それから子供を風呂に入れ、わずかに育児参加していた。

そのうち夜泣きがひどくなり、育児書などに従って早寝早起きの規則正しい生活にした。それでびたりと治まったが、私の帰りを待たずに妻が一人で風呂に入れるということになり、ほぼ完全に子育ては妻一人が担うことになった。

そのような生活がしばらくの間続いたが、慣れない子育ての緊張と責任感があったのだろう、妻はストレスを募らせていった。ちょうどそのころ私は仕事において、トラブル対応や他の係の応援が重なり、さらに多忙になっていった。妻に申し訳ないと思いながらも、仕事の責任を果たそうと本当にふんばっていた。しかし、頑張ったにも関わらず、仕事先からの良い反応はなく、他の係からの礼の言葉はなく、上司からは労われず、妻からも感謝されず、一体自分は何のために頑張っているんだと感じた。上司に改善を申し入れたが聞き流されたことで、それならせめて家族だけは大事にしようと思いついた。「育休を取ろう。子育てが大変な時期だけでも手伝お

う。」

3月上旬に、「4月から4カ月間の取得」を課長に申請したとき、「もうちょっと待てないのか。係長に昇格するかも知れないぞ。」と言われたが、異動してから、しかも役付きになってから休むのは迷惑がかかりすぎると考え、4月1日からを主張した。当初は渋い顔をしていた課長だったが、いったん受理してからは、何らかの疑義があったらしい人事総務側からの度々の照会に対して「制度を利用することに何の問題があるのか。」とかばってくれた。

当時、係の中では最年長であったので、係の皆は戸惑ったようだったが、すぐに応援してくれた。本当は半年間としたかったところを経済的余裕がなく4カ月としたのだが、たまたま4カ月以上の欠員期間であれば、アルバイトの補充が認められており、OBが来てくれたため、迷惑は少なくできたと思う。

妻も少し戸惑っていたようだったが、すぐに理解をし喜んでくれた。ただ、毎日私がかみでいることについては少し邪魔に思うこともあったらしい。それと、貯金がみるみるなくなっていくのには閉口した。妻の体調不良もあり結局5カ月休んだのだが、70～80万円はなくなった。

育児を始めた当初は本当に楽しかった。子供と一緒に朝早くから散歩し、公園で遊ぶだけで精神が広がるようだった。自分の中の澱のようなものが消えていくのを実感した。

しかし、子育てのキツさも思い知った。子供は待ってくれない。こっちの都合など構ってくれない。休憩したくても休憩させてくれない。子供が昼寝をしているときには食事の用意や掃除をして、結局、子供が夜眠りに就くまではほとんど休みなしのマラソンだった。出勤しているほうが自分のペースで休憩も取れるし、楽かもしれないと思った。それから育休を取るまでは、私が出勤する前から目の前で掃除、洗濯とバタバタし始める妻に、内心不満だったが、朝の始まりが勝負なのだと知った。ここで手間取ると、一日が非常にムダの多く、焦燥感と徒労感の多いものになってしまう。また、そういう状況でやっと一日が終わって自分の時間が持てたと思ったときに、無邪気に夫が帰ってきたらどう思うかも容易に想像が付き、それでいて、大人の話し相手が欲しくなるということもわかっ

た。

楽しいことばかりではなく、身にも沁みだが、それでも、この経験はかけがえのないものであり、数年経った今でも珠玉のように胸の中で輝いている。復帰してから、家族のために働くという気持ちが強くなり、感謝と支えられている思いが強くなった。

当時、制度はあるものの、男性の育休取得は皆無に近く、「勇気を出してよく取ったな。」と復職時に部長に言われたことを覚えている。同僚の何人かには「あなたのせいで係長になる人の順番が変わった。本当はあなたがあの仕事をやるはずだったのに。」と言われることがあるが、それは仕方のないことであり、別に序列が正しいわけでもないと思っている。後悔はまったくしていない。むしろ誇りに思っている。

人生の中で、取り返しのつかないことはほとんどないと思っているが、子供の成長は別だと思う。長い人生の中で、わずかな時間なのだから、見逃すのはもったいないと思う。

執筆者の横顔：

地方公務員 30代後半 30代前半
平成15年4月～8月(5ヵ月間)





5-07 育児の経験が、仕事の効率化や多角的視点に結びついた

育児なんかでなぜ休む？

高橋 勇樹 さん

ちょうど今年が社会人になって10年目。2人目の子供がもうすぐ生まれるある日、考えました。

「一生に一度の人生。今の人生は、自分だけのものではなく、家族と一緒に歩んでいる家族との人生。自分にも家族にも記念になるようなことをしよう！」

私は育児休業を取って、家族との絆を深めることを決意しました。

昨年12月のある日、育児休業を取得したいと会社に相談したところ、就業規則で取得できないことが分かりました。

誰かに相談しようにも、システムエンジニアという職業柄、男性が育児で会社を休むのは

ありえない状況でしたし、前例もありません。

それでも、なにか違う形でまとまった休みをとって育児をしたい旨を伝えました。

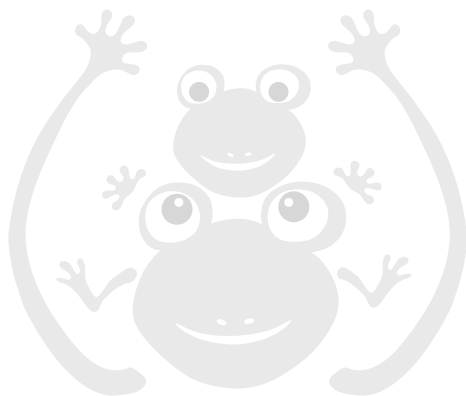
大企業ではありませんが、歴史の長い会社に勤めていたこともあり、

「男が育児なんかでなぜ休む？」

という雰囲気があり、その壁を打ち破るのに2カ月ぐらい粘り強く交渉しました。結果、特例で年休を利用した1カ月の長期連続休暇を「育児休暇」として認めてもらいました。

今年の3月、仕事を休んで過ごした1カ月間は、妻と育児を分担することができました。

ちょうど下の娘が生まれたばかりだったのでその世話を妻が、上の子の面倒は自分が見





ました。

ただ、実際に育児をやるのがこれほど大変だとは思いませんでした。

平日は仕事をしていて土日だけ育児していた頃が遠い昔のここのように、31日間連続休みなしの育児はすごく大変でした。

自分の時間は子供のお昼寝のわずか30分ぐらいしかなく、疲労が過労となり後半は疲れが胃腸にきてしまい、薬を処方される始末。

でも、それぐらいの一生懸命さが子供にも妻にも伝わったのか、現在は家族で支え合って生きている実感があります。自分が一家の大黒柱という感じではなく、みんなが柱で生きている、そんな感じですよ。

休みを終えた復帰後は、1カ月の家事から身に着けた効率性の非常に高い仕事方法で残業をほとんどすることはありません。

さらに、1カ月で身につけた主夫の視点から、ビジネスを多角的に取り組むことができます。

仕事は仕事で一生懸命にし、家族との時間もしっかり取る。家族と過ごして得た気づきや経験をビジネスに活かすことができている。

そんな「ワーク・ライフ・バランス」を実現できて毎日が非常に充実しています。



執筆者の横顔：

会社員 100人～299人 30代前半
30代前半 本人・妻、子2人(女児2人)
平成20年3月(1ヵ月間)



5-08 育休経験を生かして男性の育休促進や子育て参画促進に向けた啓発活動に努める。ワーク・ライフ・バランスの取れた働き方・生き方を実践

文部科学省で初めて育休を取得して

坪田 知広 さん

日中も「子どもと一緒に」。育休中の3か月は、これが至福の喜びだった。「男性は仕事が好きで、子育てなんか」というイメージがあるが、男性にとっても、我が子は片時も離したくない愛しい存在である。ただ、長年の伝統・慣習からか、社会が未成熟だったために、男性が「子育てに熱心、仕事は二の次」と見られることが躊躇われていたのだと思う。

私の場合は、元々、自分の想いに正直な性格だったため、子どもへの愛しさがそのまま育休取得希望につながった。男性でもそういうことは十分あり得る。これに加えて、

◇入省10年を過ぎ、子育てを通じて、もう一度、働き方・生き方を問い直したい。

◇妻の負担を軽減し、仕事での活躍を支援することで、夫婦関係を改善したい。

という想いと、仕事上でも、

◇文部科学省は望ましい子育てや家庭教育を率先すべき役所なのに「まず、隗より始めよ」の精神が希薄であり、自分が範を示したい。

◇教育行政全体を、外から、ユーザーの立場

で批判的に見て、有効な改善策を見出したい。

という考えがあったため、育休取得を決意するに至った。

これを職場において誰彼となく話しているうちに、幹部の耳にも入り、「是非、取りなさい」とまで言ってもらえるように。既成事実化が効を奏したようだが、「将来にプラスにはならない」などと説得されることを想定していたため、少し拍子抜けした感もある。

それより、妻である。職場でOKが出てから恐る恐る打ち明けたが、第一声は「無理よ。そんなことしなくていい」。長男の時、全面的に任せてしまったこともあり、「あなたなんか当てにしてないわ」という皮肉を言いかったのだと思う。喧嘩してまで育休取るのも、という弱気な考えも一瞬過ぎたが、私が第1号にならない限り、後輩達が後に続けない。もう後には引けないと思い、「家事も修行するし、月齢9か月ともなれば離乳食も大丈夫だから、お願い、バトンタッチして」などと頼みすぎて、ようやくOKが出た。

育休は、仕事よりしんどい。か弱い命を預かる責任の重さもあるが、一人ですべてをこなさなければならないこと、誰も助けてくれないことが厳しい。ミルクを飲ませたり、泣くのをあやしたりするのはいいが、子どもが寝ている僅かな隙に、炊事・掃除・洗濯などを要領よくこなすことは難しく、失敗の連続だった。もちろん自分の時間など全くなかった。

育休を取得した私は、3か月という初心者コースではあったが、そのお陰で、

- ◆男性の子育てにも不安はなく「子育ては恋愛くらい面白い」と改めて実感
- ◆子どもと共に平日昼間の地域を闊歩し、多くの人々と触れ合うことで初めて「地域の人」となり、ユーザーとして児童福祉・教育関係行政の縦割りの弊害も実感
- ◆夫婦関係の改善で新たな命が誕生（その年

の暮れに長女誕生）し、出生率に寄与などといった成果を得て、本当に有意義だったと思っている。また、育休後も、

- 後輩からの相談にのり、男性の取得第2号（それも9か月間）誕生に貢献
 - おやじの会の全国組織「おやじ日本」の創設と運営への協力。PTA活動への参画
 - 職場の「特定事業主行動計画」策定への協力（経験からの助言）
 - 出向先（三重県）での体験談の講話（県庁職員や県立高校職員会議に対して）
- など、経験を生かして男性の育休取得や子育て参画促進に向けた啓発活動に努めることはもちろん、保育園の送りは毎日、迎えも週2日以上は担うなど、ワーク・ライフ・バランスのとれた働き方・生き方を実践し、身をもって範を示しているつもりである。



執筆者の横顔：

国家公務員 1,000人～4,999人 30代後半
30代前半 本人・妻・子3人(男児2人(11歳、5歳)、
女児1人(4歳)) 平成16年1月～3月(3か月間)



5-09 育休制度は、社会人として大きな能力を身につけるための静かな時空間を用意してくれた

育休で得た、5つの仕事能力

富田 晃彦 さん

わたしたちは4年前、子を授かりました。3カ月だけですが、私が育休を取りました。子を持ったことで多くのことに気付き、学びました。ここではそのうち5つを記したいと思います。

まず、自分の想像力の限界を知り、謙虚になることができたことです。妻が妊娠してから、街中にお腹の大きな女性がたくさんいることに私は初めて気がつきました。とたんに、恐ろしくなりました。私はこれまで多くのことに気がつかず、たくさんの人に失礼なことをしていたかもしれない。私は自分に妙な自信がありました。仕事もうまくいってました。しかし社会全体が自分の先生、という謙虚で前向きな態度を忘れていました。育休の時間は、それを思い出させてくれました。

次に、人生の先輩誰をも尊敬することがで

きるようになったことです。子育てだけでなく、社会の中のいろいろな仕事、助け合いで、たくさんの方が働いていること、働いてくれたことを、心から尊敬できるようになりました。育休の時間は、そういう心を作り出してくれました。

3つめに、人の話をよく聞くことができるようになったことです。これは仕事で大いに役に立ちました。仕事でトラブルはつきものです。トラブルの相手は大変感情的になっている場合があります。しかしじっくり話を聞くと、問題の核心がよく見えてきました。じっくり話を聞くと、お互いの信頼も生まれました。この仕事能力は、育休中に鍛えたものでした。

そして、子をかわいらしく思うようになったことです。何だ、と思われるかもしれませ

ん。見た目が愛らしい、という単純なものではありません。言葉で表現するのは難しいですね。子育てを何ヵ月かこなしていくうちに、初めてかわいらしいという感情を持ちました。また、人の子もかわいらしく思うようになりました。変な表現ですが、私が指導する若手も、かわいらしく思うようになりました。子を授かる前は、子どもが嫌いということでは誰にも負けない自信があったくらいでした。育休の経験から、かわいらしく思うという感情を、実感をともなって持つことができました。若手育成への新たな意欲につながりました。

最後に、制度整備で仕事をする方々への感謝の気持ちを持つことができるようになったことです。私たちは子を授かることを予想

していませんでした。私も妻も仕事はどうなるのか、私は妻をどう支えたらいいのだろうか、何も用意していないのにどうすればいいのか。こんな私に貴重な時間を下さったのは、育休制度でした。育休制度を整えて下さったすべての方々に感謝したいと思います。

子育ては、私を成人させてくれた、と思っています。おっさんと呼ばれる年齢になってからですが、社会人として大きな能力を身につけることができました。育休制度は、そのための、ある意味静かな時空間を用意してくれました。そこで得た力を、仕事上の粘り、若手の育成への意欲、いろいろな人との信頼関係構築という形で社会に還元することが、私の次の仕事だと考えています。



執筆者の横顔：

大学教員・准教授 300～999人 40代前半
30代後半 本人・妻・子
平成16年10月～12月(3ヵ月間)



5-10 家族の支えがあつてこそ仕事もこなせることを実感。多くの家事を担っているであろう職員への見方も変化

男性初 育児休業の取得

中沢 秀徳 さん

この度私は、職場において男性の育児休業取得者第1号になりました。

しかしながら私の場合、育児休業の取得について、当初から特別に思い入れがあつたわけではありませんでした。取得を思い立ったきっかけはきわめて受動的なもので、次のようなものでした。

まず、私は人事課に身を置いています。自らの課において、男性の育児休業取得、ワーク・ライフ・バランスなどに取り組むことを業務としている部門であつたこと、このため上司からも育休取得を勧められていたこと、そしてタイミングよく(?)第2子の出産を控えていたことなどが取得の大きな理由です。つまり、自分の部署でワークライフバランスの推進に取り組んでいる手前、取得者ゼロというは対面が悪く、こうなったら手っ取り早く自分で取得してしまえという単純な理由でした。

このような状況ですから、男性が育児休業を取得する際の第1の壁である「職場の理解」は、比較的簡単にクリアすることができました。

次に家族との話し合いですが、私は妻と長

女の3人暮らしで、現在の生計は私の収入のみでたてています。育児休業取得に際して、妻の意見はというと、『休業はできる限り長くとってほしい。だけど収入が減るのは困る。』というもったもたない意見でした。そして実はこれが男性の育児休業を困難にさせる1番の理由でもあつたのです。休業となれば単純に収入はゼロになりますし、雇用保険の給付金があるといつても、現在の法律では復帰後の給付を含めて最大で賃金の50%程にしかなりません。これでは生活していくことは困難です。そこで、話し合いの結果、『休業期間は全部で1週間とする。そのうち一日のみを法律上の育児休業とし、残りは有給休暇を当てる。』という方法でした。

そしてこの1週間は、妻が産後退院してからの、体の自由が利かない期間に当てることとしました。

さて、こうして育児休業に入ったわけですが、体験してみると本当に充実した日々でした。実際には生まれた子よりも、まだまだ甘えたい盛りの2歳になる上の子の面倒をみ

ることが多く、その間に妻が下の子の世話を
するという、分業が中心でした。洗濯、掃除
などの家事はもちろん私の担当で、なれない
作業に戸惑いながらもやらせていただきました。
そして上の子が母親に甘えたいときは私
が下の子の世話をしていました。これほど長
い時間子供と一緒にいられるのはこの先きっ
と無いのではないかと思うと、大変ではあり
ながらも、幸せを噛み締めながら過ごさせて
いただきました。

一番嬉しかったのは、毎日一緒にいること
で、上の子が私になつくようになったことで
す。今までは、母親がいないとどうしても泣
き止まないことが多かったのです。妻にも感
謝されて、夫婦間の信頼関係が深められたよ
うに思います。

今回の育児休業期間はたったの1週間とい
う短いものでしたが、育児の大変さ、仕事だ
けでなく家庭を大事にすることの大切さを学
びました。育児世代はちょうど働き盛りの年

代でもあるわけですが、家族の支えがあつて
こそ仕事もこなせるのだということ、家事
育児を体験することで身をもって実感しまし
た。そして、復帰後は、おそらく多くの家事
をしているであろう家庭を持つ女性職員に対
する見方も変わりましたし、自分自身も早く
帰宅するよう心がけるようになりました。そ
のためには仕事を効率よく進める必要がある
ため、業務の効率も以前よりよくなったとい
う気がしています。

すすんでこのような休みを与え、協力して
くださった職場の上司、同僚の皆さんには非
常に感謝いたします。今後は私に続く男性育
児休業の取得者の輩出ができるよう環境づく
りをすすめていきたいと思っています。その
先駆けとして職場内に道筋をつけられたので
あれば幸いに思います。

男性の育児参加が当たり前の世の中になる
ことを、そしてそのための社会保障制度のよ
り一層の充実を願っています。

執筆者の横顔：

団体職員 30代前半 30代前半 (1週間)





5-11 育休をきっかけにワーク・ライフ・バランスを実現。それが仕事へのモチベーションを高めている

僕が育休で得たもの

堀川 佐渡 さん

6年前の長男の時から育休を取りたいと考えていたが、準備と覚悟の不足で断念。次男の時はその反省を活かし、産休・育休の妻からバトンタッチして平成20年1月から生後3カ月の次男のために育休を取った。理由としては2人の息子の立ち会い出産で感動を得ながら、なかなか毎日の育児に主体的に関与できていなかった自分への反省、妻への感謝、自分のキャリアを見直したいという気持ちもあったが、「どんなものかやってみたい!」という好奇心が一番大きかった。

職場では元々パパぶりをアピールして「パパキャラ」を定着させていたので、逆に応援して送り出してもらえて嬉しかった。それよりも妻から「育休取る=『主夫』になるんだから、当然あたしが会社から帰ってきたらちゃんとお晩ご飯できてるんだよね?」とか「家事育児のメイン担当としての重圧を思い知るがいいわ。フッフ」とか「でも家事育児をカンペキにこなされるとそれはそれで腹立つわね」などのプレッシャーを沢山もらった。

育休主夫となってからは、朝5時起床・夜25時就寝という生活で、朝昼晩の食事の準備から掃除洗濯買い物雑用、そして次男のお世話に没頭した。(中学時代3年間は自分でお弁当を作るルールを設けてくれた両親に対

して、今更ではあるが感謝した。)でもせっかくなので家事育児をやりつつも、『パパならではの育児』を楽しんで行くことを毎日の目標にした。

真冬の少しの日差しを見つけては、毛布でぐるぐる巻きにした次男をベビーカーに乗せて片道1時間程度の散歩にわしわしと出かけて行ったり、会社後輩の「ママ友」と子連れランチしたりした。さらに区が主催する離乳食教室に唯一のパパとして参加してみたり、念願だった公園デビューを目指して近くの公園を3~4カ所ハシゴして回ったりもした。(いたのはペット連ればかりだったが。)中でも最高にゴキゲンだったのは、公園のベンチで日向ぼっこしながらの缶ビール!!

そしてこの幸せな日々を忘れないようにと毎日ブログにやったことを書いていたら、それが縁でTV取材を申し込まれたりして、念願の公園デビューをTVカメラ付きで達成したりもした。こんなことばかりしていたので、妻から「あなた本当に育休楽しそうね」と羨ましがられたりもしたが、本当に楽しかったのだから仕方ない。

このように気ままに過ごしながらも、実は常に子どものことを第一に考えながら生活を組み立てる(ミルクやお昼寝の時間を軸に他

のスケジュールリングを行う) ……そんな当たり前のことを毎日繰り返すことで、自分の中における子どもや妻を大切に思う気持ちが以前よりも更に大きくなっていることに気づいた。今まで感じていた家族とのつながり、一体感が更に増したような、とさえいいだろうか。これが僕自身にとって、育休で得た一番大きな収穫だったように思う。

そしてこの育休を一つのきっかけとして、僕は自分のキャリアも大きく進路変更した。それまではIT業界の会社で営業現場の仕事を主にやっていたのを、育休取得直前に人事部内にあるワーク・ライフ・バランス推進部門に異動願いを出したのだ。育休を取ることによるキャリアへの悪影響を心配するよりも、家族との将来をなおざりにして仕事だけを優先させるような働き方を見直したいとかねてから思っていたのだが、せつかく育休を取ったのだからトコトンその道に行っちゃ

え！ と考えたのだ。

幸いにも異動は認められ、役員以下の異動挨拶にもベビーカーに次男を乗せた「子連れ狼」スタイルで臨んだ。このため僕のパパキャラは以前にも増して強固なものとなり、復帰して半年が経つ今も、毎日ほぼ定時には会社を出て次男を保育園に迎えに行くスタイルで家庭と仕事の両立をさせてもらっている。この点では今でも会社に非常に感謝しているし、このことが自分の仕事へのモチベーションを高め、自分と会社がWin-winの関係になれていると感じている。

このように、僕は育休を取ったことによって「家族との一体感」と「キャリアの見直し」という二つの収穫を得ることができた。人それぞれ考えや価値観は違うと思うが、僕は人から育休について聞かれたら「すっごく楽しいから、取らなきゃ損だよ」と自信を持って取ることを勧めている。



執筆者の横顔：

会社員 5,000人～ 30代後半
30代後半 本人・妻・子2人
平成20年1月～4月(4ヵ月間)



5-12 仕事から取り残される不安を乗り越えて取得した育休が、次の男性の育休取得者へつなげた

固定観念をぶち壊せ

松井 孝浩 さん

私が育児休業を考えたのは平成 15 年 12 月の第 5 子の誕生の際(妊娠中)でした。妻は「子供が 4 カ月になったら託児所に預けて職場に復帰したい」と言いました。妻は現在の職場で今までに 3 度、通算 20 カ月(短いと 4 カ月間)の育児休業を取得していました。妻は何度も休むことに抵抗を感じ、また妻自身一緒に働く人が長期休んでほしくないと思っていたのです。共働きのため普段の家事・育児も忙しい中で、妻の言葉に私は「子供が小さい時からの託児所の往復は親子ともに負担が大きい。何より子供がかわいそう。1 歳までは自分が成長を見届けたい」と思いが沸き、育児休業を取る事を即決し、妻に伝えました。妻は考えもしなかった即答に驚き、「本当に取るの、取れるの」と半信半疑でした。

実際、職場に自分自身が育児休業を取得することを公表したのはずっと後のことでした。なぜならば、男性の育児休業は前例がなく、制度はあっても取らないものと誰もが思っていると私は感じていたからです。まず

手始めに職場の同僚に片っ端から相談し、反応を確かめたうえ、自分の希望を上司に伝えました。上司はまさかの様に捉えられましたが、私の真剣な思いが伝わると育児休業取得に動いてくれました。取得手続きには女性の場合と違い、初めてだらけのことだったので手続きが難航する度に「本当に取るのか」と上司に確認されました。

育児休業は平成 16 年 4 月妻の産後休暇明けから子供が 1 歳になるまでの 8 カ月間取得しました。育児に対する不安は 4 人の子の育児経験(育児休業取得には普段からの育児及び家事参加は必要と取得経験からも再確認した)から、全く心配はありませんでした。しかし、その一方で常に心の奥に引っかかっていたのは「男性は仕事をするもの」という固定観念です。

男性にとっては世間の輪(=職場)から外れることによる孤立感、異端者の印象を抱かれることで昇進に響く、所属している職場が

ら離れることで皆に遅れを取ってしまい復帰が出来るか等の不安が沸きあがります。男性の育児休業取得が進まない1番の理由はそこであり、上司が最後まで取得に念押しされたのもそのとおりだと思います。自分も割り切ることが出来ない点でしたが、育児休業を取得してみると実際はただの思いすごしでした。育児休業中には父子で育児サークルにも積極的に参加しました。そこでも父親がサークル参加や育児休業取得することに対し驚きの反応が多くありましたが、父親に育児休業を取得して欲しいと願っている声もたくさん聞かれ、育児休業取得に前向きになれた体験でした。育児休業で何よりも良かったことは仕事に追われず、親として子供とゆっくり向き合える時間が取れたこと。子とともに自分も成長していると実感出来たことで満足しています。職場復帰後は育児休業取得前の状態に戻るには少々時間は必要でしたが、周りの理解や協力のおかげで乗り越えることが出来

ました。とはいえ、育児休業中も職場に顔を出して進捗状況を確認していました。

仕事を持つ女性(母親)は、育児経験等から色々な発想をし、仕事に役立てていると常々思っています。以前の私は周りの反応を見ながら発言していました。育児休業取得希望を表明後は自分の意思をはっきり伝える様になりました。それが職場内の意見交換の活性化に繋がり、良い仕事に発展しています。今回の経験は仕事において、また子育てにも役立っています。まだまだ男性の育児休業取得は、かなり勇気がいることです。私の育児休業取得で第二の取得者が出ました。取得したいと思う人が他にもいたということが分かりました。一番の良い波及効果でありました。男女に関係なく育児休業を取得するのは当たり前、特に男性が安心して取得出来る子育て支援制度の確立と、なにより多くの人の意識の変革を期待します。



執筆者の横顔：

公務員 1,000～4,999人 30代後半
30代前半 本人・妻・子6人
平成16年4月～12月(8ヵ月間)



5-13 育児休業をとおし、「家族という味方」と「会社という味方」の存在に気づく

育児休業を取得して

箕浦 壮志 さん

第二子の出産予定日の2カ月ほど前、「育児休業を取得してみたら」と上司から話を聞いたときは、「育児休業……？何それ。俺が産むわけじゃないし…。休んで何するの」というのが率直な気持ちでした。

家に帰り、何気なく妻に育児休業の話をする、普段は強気な妻が「できれば育児休業を取って一緒にいて欲しい。第一子(娘)も一人で大変だったけど、今回は娘もいるから、できれば一緒にいて欲しい。出産の時ぐらい力になってくれたら……」と意外な答が返ってきました。

振り返るとここ数年、仕事中心の生活で、3年前に生まれた娘もいつの間にか大きくなっていて……程度の子育てしかしていません。家族にとっての自分は、毎月しっかり給料さえ入れればいい程度の存在だろうと思っていたので、家族との関係がこのままで良いのか、自分の存在とは何だろうかと、ふと考えました。

翌日職場で、育児経験のある同僚(女性)から、女性にとって出産が本当に命がけであ

ることや、初期の育児は特に大変であること、家族との絆を復活？ させるためにも育児休業が利用できるのであれば、したほうが良いのではないか、などの話を聞きました。

また、ある上司からは、「会社も組織であるが、組織の最小単位はやはり家族である。その基本となる家族を大切にできないものは、会社や、会社のお客さまも決して大切にできない」と言われました。

そのようなアドバイスもあり、取得を急に決めた為、2週間と少し短い育児休業となりました。それでも、私が育児休業を安心して取得できるように、上司や部下も快くサポートしてくれ、業務の引継ぎ等適切に実施できました。業務に支障がでるのならば、育児休業よりも仕事を優先させたいというのが、一般的な考え方だと思います。今振り返ってみると、私が育児休業取得に踏み切れたのは、組織のサポート体制がしっかりしていたこと、組織の育児休業に対する理解が決め手であったと思います。

育児休業の2週間は何か特別なことをし



た訳ではありません。ただ昼夜関係なくあかちゃんのオムツを換え、泣いたら抱っこし揺すってあげる。3歳になる娘を、妻の代わりに近所の公園に連れて行って一緒に遊ぶ。妻の指示に従い買い物に行く。妻と子供の日常が私にとっては非日常で、経験するすべてが新鮮でした。私が仕事をしている間の妻の大変さや思いを感じ、子供が成長する姿をすぐそばで四六時中見ることができました。

たった2週間の育児休業取得であり、2週間で育児の何がわかるのか?と笑われるかもしれませぬ。しかし、この機会がなければ、育児に主体的に関わるどころか、育児を考え

ることさえ全くなかったはずです。育児休業は家族に対する私の考え方を考える大きな転換点となり、私の人生にとって大変価値のある体験でした。

育児休業を取得するまでは、家族のため、会社のためと口では言いつつも、何か孤独で心の中では自分のためだけに働いていた私であったと思います。今回の育児休業をとおし、家族の大切さを学び、「家族という味方」と、このような機会を与えてくれ、積極的にサポートしてくれた「会社という味方」の存在に気が付くことができたことで、今まで以上に一層仕事にも力が入るようになりました。



執筆者の横顔：

金融・会社員 30代後半 30代前半
本人・妻・子2人(男児1人(1歳)、女児1人(4歳))
(2週間)



5-14 育休を取ってみて、働く意義が明確になり、仕事の速度をあげるとともに質を高めようという意識へとつながった

尚子との育児休業体験記

山本 武 さん

1 育児休業の取得を決意したきっかけ

3人目の子供でおそらくこれが取得する最後のチャンスだと考えました。また、周囲でも男性の従業員が取得するケースはまだ無く、私が取得する事で制度利用を促進することにつながれば良いという思いもありました。

2 職場とのやりとり

職場は休暇取得全般について理解があるほうだと思います。年初の面談の際に取得の予定を伝えたところOKが出ました。といっても50歳代の上司は「子育て頑張ってるねー?! (こんなヤツもとうとう出て来たなあ)」と半ば珍しいものを見るような感じではありませんでした。

3 家族とのやりとり

妻は当初は積極的、途中でやや消極的になったものの、最終的には再び積極的に受け入れてくれました。妻は当初、特に休業前は自分が長期間育児休業で職場を留守にする事

への不安から、休業期間の一部を夫と交代して自分の休業を短縮することに積極的な考えでしたが、一旦育児休業期間に入り、それが一定期間継続すると、(あと1カ月くらい休んでも変わらない、どちらかという休んでいたい、おっぱいもはったままだし、子供は可愛いし)という考え方から、(特に取得してもらわないかな……)という消極的な姿勢に変わっていきました。しかし、二人で話し合いをした結果、最終的には制度利用の意義をお互いに理解して再び積極的な姿勢になりました。子供達はまだ育児休業の意味はよくわからないようでした。

4 感じた事

思ったより忙しいというのが実感でした。私の育児休業中は既に一日2~5時間程度のならし保育が始まっていたので一日中面倒を見ていたのは3週間のうちわずか数日でしたが、それでもご飯を食べさせ、食卓を片付け、床を掃除し、オムツを替え、保育園へ送り、他の家事を片付けた後、再び保育園に迎えに



いき、……とやっていると自分の時間は殆ど無いというのが実感でした。当然ですかね。

それでも、子供の笑顔とずっと一緒にいられるのは幸せな事だと感じました。1日1日と成長していく子供を見ていると自分の人生を思いっきり肯定したくなりました。自分は正しい事をしているのだと。また、ちゃんとした父親にならなければならないのだと、改めて思うようになりました。

5 経験が復帰後の仕事に与えた影響

以前よりも労働する意義を明確に感じるようになりました。自分の親が自分にしてくれたように、我が子を大きくする為に働くのだ

という事を自然と思うようになりました。また、仕事の速度を上げて定時間で仕事を終わらせる意識、終わらせなければいけないんだ、という意識（こんなところでモタモタしてられない。判断の質と速度を上げ、アウトプットのクオリティを高めた上で、さっさと家に帰らねばならん……という気持ち）が以前よりも強くなりました。実際、復帰して以降、殆ど残業はしていませんが、仕事のアウトプットは変わらないか却って上がったかも知れません。上司の評価もますますです。



執筆者の横顔：

会社員 5,000人～ 40代前半
40代前半 本人・妻・子3人
平成20年7月(3週間)



5-15 仕事に復帰してからも、仕事と自分自身の生活とのよいバランスを実現していくことが必要だと考えるように

育児休業の体験から

吉田 朗 さん

1 育児休業の取得を決意した想いやきっかけ
妻の妊娠が発覚したのが今年の10月。その当時私は内閣府の男女共同参画局推進課に所属しており、柔軟な働き方を含め、男女ともにそれぞれの希望を実現できる社会を進める立場にあった。また、同じ職場の男性の先輩で育児休業を取得した方も多かった。このようなこともあり、自然と私自身も育児休業を取得したいと思った。

2 育児休業を取得するに当たっての職場とのやり取り

育児休業を取得するに当たっては、職場の理解が不可欠だと思う。私の場合、特に妊娠初期に妻の体調が不安定なことが多く、一方で仕事が深夜に及ぶこともあったため、仕事と家庭生活の両立に不安を抱えていた。そこで上司に相談したところ、妻の体調に配慮して勤務時間を決めるよう勧められ、また同時に育児休業の取得についても積極的な後押しをいただいた。幸い妻の体調はそれほど深刻になることはなく、体調の悪い時には上司と

相談して帰宅を早めるなどして対応できた。しかしながら、妊娠中常に妻の体調を気にかけていただいた上司や職場の理解がなければ、実際に育児休業の取得を決意するにはいたらなかったと思う。

3 育児休業を取得するに当たっての家族（特に妻）とのやり取り

育児休業の取得について妻に相談したところ、当初は驚き、また戸惑っていた。男性が育児休業を取得するということが妻にとって珍しく感じたようだ。しかし育児休業を経た今は、子どもが生まれて間もない精神的にも肉体的にも大変な時期と一緒に子育てができてよかったと言ってくれている。

4 仕事と家庭の両立、子育ての楽しさや重要性など、育児休業中の日々を感じる（感じた）こと

育児休業中子育てに専念できたことはまたとない貴重な機会であった。私の場合は運良く出産にも立ち会うことができたため、子ど



もが生まれてから日々成長していく時間を一緒に過ごすことができ、これほど楽しいことはなかった。一方で、子育てが想像以上に大変であることも知ることができた。ミルクやおむつ替えなど昼夜を問わない子供からの要求に、時に愛らしくもあり、また時に手に負えないように思い呆然とさせられることもあった。

育児休業中に感じたことは、育児休業を取得したから子育てに関わるのではなく、常に妻や家族と協力して子育てすることの大切さである。自分の子どもであっても、特に子どもと二人だけで長時間一緒にいると、ストレスを感じることもある。ストレスがたまると、自分自身に余裕がなくなり、子どもからの要求を疎ましく感じてしまうこともあった。こ

の経験から、育児休業後であっても、妻や家族と協力しながら子育てをしていくことが大切だと感じた。

5 育児休業取得の経験が子どもとの関係や復帰後の仕事に与えた影響

育児休業取得の経験を通じ、今後も積極的に子育てに関わっていきたいと思えるようになった。その理由は、単に子育てが楽しいというだけではなく、子どもと向き合いつつ良い関係を築くためには、妻と協力して子育てをしていくことが大切だと感じたからだ。そのためには、仕事に復帰してからも、仕事と自分自身の生活とのよいバランスを実現していくことが必要だと考えるようになった。



執筆者の横顔：

国家公務員 20代後半 1ヵ月間

